

令和6年度 国産材の安定供給体制の構築に向けた 東北地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和7年1月23日（木）13:30～16:00
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

（1）冒頭挨拶

○東北地区需給情報連絡協議会 鈴木 会長（ノースジャパン素材流通協同組合 理事長）

全国ではなく各ブロック別会議を行うことは、地域ごとに事情が大きく異なるというところが最大のポイントだと思っています。

東北地区の場合は、合板・集成材工場の大型工場が多数立地しており、B材需要が非常に大きいという特徴があります。それに加えて銘木からバイオマス発電までのS材、A材、B材、C材、D材、すべてにわたって多くの工場が立地しているという特徴を踏まえて今回の協議会と考えて頂ければと思っている。

現在の状況は、年末から川上の供給と川中の需要にギャップが生じており、需要が製材・合板材・集成材・バイオマスとも大きく増えており、それに対する供給側の方がそれに追いついてない。統計的な数字とは違う現状を皆様方からご発言いただければと考えております。

通常の協議会は、いつも新設住宅着工戸数の動きとか需給の話がメインになりますけど、今回は、川上・川中の状況が極めて激しく動いておりますので、その状況等、皆様からご意見をいただければと思っております。開催にあたりまして一言ご挨拶を申し上げました。よろしくお願いいたします。

（2）趣旨説明

○林野庁材産業課 高橋課長補佐

住宅着工戸数の低迷、資材費、人件費、物流費の高騰といった厳しい状況が続くなか、皆様におかれましては、国産材の供給及び利用に取り組んでいただいておりますことを感謝申し上げます。その様な中、木材需給について情報共有や意見交換をしていただき、引き続き、国産材の安定供給体制の構築に向けてご協力いただくため、今年も協議会を開催させていただくところです。

今回は例年と異なりまして、需給動向等に加えて新たに「木材取引の現状と再造林

の確保に向けた取り組みについて」という議題を設定させていただきました。
持続可能な国産材供給に向けては、再生林の確保が重要ですが、森林所有者がそれを躊躇してしまうという状況が続いております。その大きな要因は丸太や木材製品価格の低迷というのが一つあると考えております。

このことについて、認識を深めるためには木材取引の現状がどうなっているのか、丸太や木材製品生産については林業経営のコストを関係者がどのように意識しているのか、様々なコストは適切に価格転嫁できるのか、といったことがポイントになると考えております。そういった考えのもと、今回新たな議題を設定するとともに、事前にアンケートをさせていただきました。

木材の取引実態やコスト構造については、林業・木材産業、さらに住宅産業等の川下側も交えまして、議論と理解を深めることが重要と考えております。川上・川中・川下のそれぞれの事情があると認識しておりますが、日頃直接取引をしていないとか、付き合いの薄い相手もいらっしゃると思います。今回の議論におきましては、各プレイヤーが抱える事情をお互いに認識し合うということが大事だと考えております。今回の協議会においては、方向性や何か決めなければいけないという性質のものではありませんので、本日の意見交換におきましては、是非とも率直なご発言をいただきたくお願い申し上げます。なお今回の議論に関連しまして、取引や価格形成、お金のやり取りといったことについて、正しく知識を深めたいと思っております。今回、公正取引委員会様から公正な取引に関するルールや価格転嫁の重要性等についてご説明いただきます。是非とも参考にして頂ければと思います。
本日はよろしくお願いいたします。

(3) 議事

○秋田県立大学 木材高度加工研究所 高田 教授（以下、座長）

昨年令和6年1月に開催された前回の会議の状況報告を先ず、一度、取りまとめて皆さんと共有した上で、今回の会議に入りたいと思います。前回の会議で以下、今申し上げます三点について報告がございました。

一点目、住宅需要の低迷によって製品価格販売量が低位で推移していて、対応に苦戦をしているということです。

二点目、2024年はエネルギー価格の上昇のみならず働き方改革による物流費、人件費の上昇など生産コストが上昇するという状況下で、需要拡大、新たな木材事業の創出が必要であるというような報告もございました。

三点目、そのためには、木材価格自体の底上げが必要ではないか、というような報告もあったところです。

また、国産の原木価格は、一部上昇する地域もあったものの、全体的に言うとウッドショック前の価格に戻りつつあるといった報告もございました。他方、ユーザーについては、ウッドショックを経て供給リスクが認識されている中、為替等の影響により価格の上昇傾向が見られる状況だと言うご報告もあります。このような前回の状況の報告・ご意見を踏まえ、やはり国産材の活用を進めていくためには、これまで以上に需給に関する情報共有や関係者間の意見交換を進めていくことが非常に重要であり、先ほど林野庁からもあったような木材価格についての議論を深めることも必要ではないかと感じているところです。

まずは、議題1として、林野庁から需給動向等についての資料説明をいただきます。その後、直近の需給の動向等について、皆様から情報共有・意見交換をいただきたいと考えております、よろしくお願いいたします。林野庁から資料説明をお願いいたします。

議事1 「木材需給の動向と見通しについて」

○林野庁木材産業課 高橋課長補佐

資料1, 2について説明。

○高田座長

林野庁からのご報告でした。ここで参加していただいております事業者の皆様から、東北地区の原木製品の需給状況や見通し、現地の状況や今後の生産体制等についてコメントをいただきたいと思います。

一部で原木取材量が減少傾向、また、原木価格が上昇傾向にありますが、この点についてもご意見等ございましたら、是非お願いいたします。

また、樹種による引合いの違い、スギだけではなく広葉樹もあれば伺いたと思います。国産材の活用拡大の取り組みなどもありましたら、合わせてご報告お願いできればと思います。

川上・川下の事業体様におかれましては、持ち家や分譲住宅・非住宅の需給状況や今後の見通し、製紙やバイオマス発電における需給状況等についてもご意見等を伺えれば幸いです。

まずは川上側から青森県森林整備協同組合の相馬様お願いいたします。

○青森県森林整備協同組合 相馬専務理事

今年は特に、青森県は非常に雪が多く、そのような状況下で、実際の生産事業前の除雪がひと苦勞で作業時間が短くなっており、生産の供給量が落ちてくるのではないかと。事業期間もある中で非常に厳しい状況になっております。青森県・東北全体的に

も言えますが、国有林面積が多く、生産請負の事業体も多いです。

生産請負事業の生産の経費の中で、国有林の場合は、「低コスト」、「生産性向上」と非常に言われる。となると、どうしても高性能林業機械の導入を検討しなければならないこともあります。しかし、高性能林業機械の価格が高騰している。ハーベスタヘッドで2,000万円以上、トラックを購入しても3,000万円以上、しかも納期が一年以上となっている。

高性能林業機械の経費が、その生産請負の経費にどの程度見られているか。いくら「低コスト」と言われても、人件費・燃料費等の積算経費の部分を考慮して頂かないと、各事業体も非常に厳しい状況が続いている。民有林・自社林等があれば生産性とかは厳しく見ないが、国有林の生産請負事業の中で、高性能林業機械の話は避けて通れないので、その経費を何とかしていただきたいと思います。当組合の事業体からは、そういう話が頻繁に出ています。以上です。

○高田座長

冒頭に鈴木会長から東北の山の特徴としては国有林が多いこと、それから合板・集成材工場が色々ある、とご意見を頂いたのですが、今、相馬さんのその話で国有林の比率が高い地域だからこそ、今ご指摘・ご要望と言ってよかったでしょうか。ご意見として非常に重要なご意見だと感じました。

続きまして、岩手県森林組合連合会の伊藤様お願いいたします。

○岩手県森林組合連合会 伊藤木材販売グループ長

今年に入って、合板・集成材工場では、特にスギが不足してきているようです。その要因としては、やはり昨年の夏場の「虫害」ではないかと思います。あの時期に当用買いが非常に広まり、在庫を持たない購入者が非常に多く、その後の10月以降は虫害の心配がなくなる時期となり、購入者の仕入れも少しずつ強くし始めたが、素材生産業者や森林組合にそのサイクル情報が中々伝わっておらず、情報共有が必要かと思っています。2月頃まで間伐中心に生産するため材が出てこないで、そこに急に欲しいからと相談があっても中々対応しきれいていません。季節柄、毎年同じような状況が続いており、10月以降の課題として「皆伐をもう少し増やす」とか「夏場なるべくちょっと下げる」とか、皆さんと上手くいく努力していかなければ…、と個人的にはすごく思っています。

盛岡木材センターは広葉樹が非常に多く、価格においては、大幅な値上がり傾向となっております。前年比で2023年は平均単価が約31,500円/m³、販売材積は23,500m³ほど、2024年は23,400m³と横ばいであったが、平均単価が36,200円/m³と全樹種共通して約5,000円/m³単価が上昇し、その中でもナラは、2023年は平均37,600円/m³、2024年は平均47,100円/m³と、10,000円弱ナラの単価は上昇しております。薪・

細物の販売もありますので、製材等だけで集計すると違った結果が出てくると思います。

1月の「市」の広葉樹は、昨年は1,500 m³であったが、今年は2,500 m³と1ヶ月集計で1,000 m³も多い数量となり、広葉樹については非常に市場の集まりは良くなっていると思います。簡単ですが以上でございます。

○高田座長

今広葉樹の価格が上がってきて、材の供給量も増えている現状ですが、しばらく続くと感じていらっしゃいますか？

○岩手県森林組合連合会 伊藤木材販売グループ長

市場の方はやはり例年ですと、4月までは大体この単価を維持したまま推移していきます。ただ5月以降は夏伐りになってしまいますので、値段は一気に低迷してしまいます。5月～9月ぐらいまではちょっと安いままで…。また10月ぐらいから値段がちょっとずつ上がってくると思います。ただ、皆さん底上げは相当している状況ですので、その年間の平均価格はそんなに安くなることは、今のところ考えづらいと思っています。

○高田座長

もう一点聞かせてください。今広葉樹が大部動いているお話だったのですが、それぐらい広葉樹が動いている状況で、丸太、特に針葉樹の丸太の供給への影響はどうでしょうか。

○岩手県森林組合連合会 伊藤木材販売グループ長

岩手県は、県北で特に広葉樹、カラマツ、アカマツが多く生息しており、夏場これだけスギが非常に動きづらい影響もあって、できれば広葉樹を伐採したいという動きは一部で見られる傾向があります。

広葉樹を伐ってしまうと、1ha当たりの生産性で機械は中々使えない。数量としては減ってきてしまう。ただ、安定的に売れるといったメリットを感じてやっている素材業者さんは多いのかなと思います。

○高田座長

地域でバランスよく材料供給ができて、調達もバランスよくできるというのはベストだと思います。やっぱり目の前の事業に集中するとバランスが少しずつれていく、ということも致し方ないのかなというように感じておりました。

続きまして、川中の方から三菱製紙の早乙女さんお願いします。

○三菱製紙株式会社 北上工場 早乙女 林材グループリーダー

昨年までは新北陵林産株式会社と言う名前で出席をさせていただいておりましたが、2020年の4月に会社を三菱に統合し、それぞれの工場、八戸と北上の工場の調達部門として今は機能している。今回は三菱製紙として参加させていただいております。

「川下」について簡単にご説明をさせていただきます。

紙の需要は毎年減少している状況で、ただ減少した分がそのまま減産になるかというところというわけでもなく、紙になる前の段階の「パルプ」ですが、パルプは作れば売れるという状況で、八戸・北上工場ともに、パルプ生産のフル操業を目指してやっていくことを方針としております。

2024年度は、操業面のトラブル等もあり、今後どうなっているかという意味では、来年度チップ消費量は前年比では増えるであろうと見ております。八戸・北上工場について、少しご説明をいたします。

八戸工場は、広葉樹の輸入材が主体になっておりますが、針葉樹は国産材を100%使用しております。この中で広葉樹・針葉樹、それぞれ両方で国産材は最大限使用して行く基本方針です。

北上工場につきましては、国産100%で利用しております。これまでは広葉樹がメインでしたが、今後は針葉樹を使用し、トータルで使用量を増やして行くという方針となっております。八戸・北上工場ともに現状としては、国産チップの集荷量が減少している傾向にあります。

国産チップを使用した製品については、原料チップの確保が生産の律速になるレベルというほど、集荷が不調な状況であります。具体的には、特に広葉樹の国産材、岩手県森連さんからは、市場は非常に増えていますとお話があったのですが、「薪材」等について製紙用チップ用として入ってきたものではないかと気になります。いずれにしてもチップの集荷量については減っているというのが現状です。

もう一つ大きな課題がチップの物流になります。これが今年度に入ってから是非常にドライバーさんが足りず、今までどおり運べなくなっており、チップの生産拠点に原木チップの在庫があっても、パルプ生産拠点に十分なチップの在庫が貯められない状況になっています。

今後のパルプ生産拠点に、チップだけでなく、原木としてでも運ぶなど、チップの物流面で効率化に取り組まなければいけないと考えております。八戸・北上工場は共に今後の国産材増加に向けて集荷拡大に取り組んでいく状況でございます。以上です。

○高田座長

続いて、川中からお願いいたします。協和木材の矢口様。

○協和木材株式会社 矢口工場長

先ず、我々の現状のところをお伝えしたいと思います。先ほどから皆様おっしゃられているとおり、原木の集荷については非常に苦戦しているような状態になっております。

その原因として、7月の山形県内の豪雨災害が発生しまして、国有林であり民有林であり、その林道の崩れによって、「現場に入れない」、「運べない」とのことで、入荷が減ったのが大きく影響したのかと思っております。

製品の出口のところですが、受注に関しては一定程度の受注をいただけているということで、「生産＝出荷」のイメージです。なんとか今のところは推移しているのかなと思っております。

先ほど「虫害」について話がありましたが、製造側から「虫害」を見ますと、このところ温暖化の影響により原木の虫害が非常に長期化しているようなイメージがあります。それによって歩留まりの悪化や、生産コストの増加というところが現れてきていると思います。集成材についても、製造コストをいかに下げるかというところの努力が必要なのかなと思っております。

法令も色々と変動がある中で、「輸送費に関わる」ところや「製造現場では有給取得の5日間の義務化」など、現場の従業員確保としての課題かなと感じております。ある意味、有給の取りやすい会社ではあるかと思うのですが、管理者側として見るとちょっと苦労するということもあり、場合によっては製造人員の増加を考えていかないと安定した生産ができないのでは、というふうに見ております。

あと国産材の比率については、徐々に集成管柱については上がっているような状況ですが、未だに外材の影響を受けているということがあり、世界情勢等も含みながら推移していると思っております。

今後の当社の見解としては、新庄工場だけではなく会社全体グループ全体と言えることですが、今後海外への輸出ということへの切り替えあるいはこのマーケットの転換というところも考えつつ進めていこうと思っているような状態ですはい以上となります。

○高田座長

多岐にわたってご意見いただきましてありがとうございます。働き方改革でいろいろと現場の方も大変だと思いますが、一点、川中から再度聞いてみたかったことですが、物流 2024 年問題のトラック運送流通については、2024 年に入る前、入ってからすぐ、相当いろんな議論があったと思いますが、今の状況はどのような感じでしょうか。

○協和木材株式会社 矢口工場長

やはり影響は出ております。基本的には到着単価での運賃込みの金額にしております。運賃分のアップに関しては、原木価格がいくらで、運賃がいくらでと、打ち合わせして決めておりますが、運転手さんの不足や労働時間の規制というところは、物流費の増加に大きく影響してくると思います。実感としては、運賃アップは今もすでに発生しています。

○高田座長

今のご意見は単に労働時間だけの問題じゃなくて、労働者自体の数と社会全体の問題として捉えられるので、そういう意味では集成材を作っていれば、協和木材さんだけではなくて、ほかの木材産業全般に大きな影響になってくる可能性があるというふうに感じた次第です。製材側から秋田県木材産業協同組合連合会の鈴木様、秋田県としてどうでしょうか。製材の状況を少し教えていただければと思います。

○秋田県木材産業協同組合連合会 鈴木専務理事

木材需要の低迷している中で、やはり製材工場では減産している状況です。それに加え、電気代や原木だとか製品の物流費のコストが増大しており、その分製品に価格転嫁ができればいいのですが、今の需要低迷している中では、それもできずに非常に厳しい状況が続いているのが現状です。

また、4 月から改正建築基準法が施行されることで、性能の明らかな JAS 構造材のニーズが高まるということで、機械等級の取得というものも検討している工場もございますけれども、その基準に満たない製品への対応をどうするか、強度があっても「虫害」による見た目の欠点で価格が下がる等の対応をどうするのか、というようなことを、今検討しているところもあると聞いております。

原木につきましては、製品需要が低迷している中で、伐り控えもある中、現在、製材用原木が足りなくなっているという声も聞こえます。今年度は、その立木、森林そのものが悪いのか、原木市場の方でも、合板用が多くて製材用原木の A 材の出材が少ないというような話も聞こえております。その辺、非常に今苦労しているところでござ

ざいます。

先ほどの協和木材さんの方からお話がありましたけれども、その「虫害材」の問題ですけど、梅雨時期の虫害材の問題は、昔からあったわけですけど、ここ数年、虫害材が増加しているのか、話をよく聞くようになっております。

虫害材については、製品の品質に直結するため、できるだけ発生しないような取り組みというものが、やっぱり今後必要になってくるのかなと思っているところです。以上でございます。

○高田座長

虫害に関しては先ほど矢口さんの方からも少しコメントがございましたが、いかがでしょうか。虫害が出ている時期の後ろが長くなっているのでしょうか。ここ2年間、製造工場の方からはやっぱり虫害材が大変だって話が聞くようになりました。昔から虫害材の時期（梅雨時期）があったのですが、最近多くなったように感じております。青森県森林整備協同組合 相馬常務理事どうですか。

○青森県森林整備協同組合 相馬常務理事

そこまで極端に虫害が発生していると、そういう感じはないですね。国有林のスギとヒバの委託販売もやっていて、スギでも極端に虫害が多いという気はないです。

○高田座長

国有林の人に聞いた方が良いのかなと思います。東北森林管理局の岩谷さん、コメントいただければ幸いです。

○東北森林管理局 資源活用課 岩谷企画官

やはり国有林の生産事業というのは、虫害発生時に仕事が始まっているので、どうしても発生は有るというもので仕事はしているのですが、やはりここ数年ちょっと長くなっているような気がします。後半の方まで虫害が伸びているような感じは受けません。

○高田座長

伐り方も含めて、気候だけは変えられないとすると、今までのやり方のままでやると虫害がずっと出ている可能性があるので、今回のような協議会でご意見が出たというのはいいことだと思います。これを続けたいために、何か方策を色々と関係者の中で、タイミング等々、話し合いができるようになればいいかなというように

感じました。

続きまして、日本製紙の伊藤様をお願いします。

○日本製紙株式会社 石巻工場 伊藤原材料課長

先ほど三菱さんから紙の話がありましたが、日本全体での紙の内需は、2024 年は前年比マイナス 4.1%といった形になります。2025 年も 2024 年比マイナスの 4.2%といった形で、やはり紙の減少というのは止まらないと言ったことが現実だと思います。そういった中ですが、当社石巻工場の事情といったことになりますが、他工場からの生産集約、トラブルのバックアップ生産によりまして、石巻工場での紙の生産量は、この 24 年度と 25 年度は変わらないといった形を予定しております。また、仮に、こちらの方もお話出ておりましたけれども、紙に余裕が出た場合、こちらの方はパルプを作って、最大限生産を上げて他工場にパルプを融通するということで、生産についてはできるだけ最大生産で走っていこう、そういった考えの中で、原材料のプライオリティ、こちらの方は、国内材チップは、やはりファーストといった形になっておりまして、国内で足りない部分は海外でというスタンス。こちらの方は昨年度、今年度、また、この先も変わっていかないのかなといったことで、国内に対する需要については非常に旺盛といったことになります。簡単ですが以上です。

○高田座長

続いてもう一方、こちらからご指名させていただきます。花巻バイオエナジー 高橋様 何かご意見をお聞かせください。

○株式会社 花巻バイオエナジー 高橋代表取締役

昨年の夏から合板の動きが鈍いので、バイオマス用材が入手しにくい状況が続きました。といっても冬期の原木確保のために、虫害を含めて約 10,000 トンの原木をシステム販売を活用しながら確保して、今現在は 24,000 トンまで貯木ができております。さらに、軽油等の高騰とか輸送費・人件費が上がりましたので、バイオマス発電所としては経営的に厳しい状況が続いています。

その背景に岩手県の事情だと思いますが、県内の林業事業者が生産したチップが他県に流れているという実態がございます。青森は八戸、宮城は山形の方に流れている現状を聞き取りしております。特に大型木質バイオマス発電については、本来、輸入の PKS ペレットでやるべき 24 円材で認められているわけですが、当然、今の「為替（円安）関係も含めて国内材の 32 円材比率を上げたい」という動きを聞いておりますし、FIT の変更を国にお願いしたいという話も確認してございます。我々 6 メガの発電所ですが、地産地消型の県産材 100%でやっておりますので、我々では提示で

きない単価、聞取りでは、絶乾で 30,000 円、トン当たり 15,000 円ぐらいで集められますので、当然、黙っていても集まるであろうと思います。

岩手の事情からすると、今後に 2 メガの発電所が 2 基、7 メガが 1 基の建設予定でございまして、この状態で発電を開始した場合ですね、特に私どもが試算したわけですが、2 メガの発電所はそんな単価ではチップを買えませんし、ちょっと入手しにくいことが想定されます。

最悪であれば倒産もしくは、売電を停止するという事も予想できるのかなと思っておりました。そこで木質バイオマス発電の売電については、再生可能エネルギーの中では、32 円と高い売電単価を国の方で維持していただいておりますので良いのですが、輸送費・人件費、今までお話聞いたとおり、高騰しておりますので、中々難しいと思っております。ちょっと要望めいたことにはなりますが、そういう大型発電所の流れのバイオマスの比率変更は、国としては認めてもらいたくない。

次に関わることで、再造林のことも含めてです。本日弊社のであるグループタケエイ林業が地元紙の岩手日報に掲載されました。現在、花巻、遠野で 620ha の山林を購入してございます。山林経営をしながら、我々発電所にバイオマス用材を出し、枝・タンコロなど林地残材を活用し、移動破砕機で発電燃料のバイオマス用チップを確保するという動きを進めております。

当然、植林は岩手県が開発した少花粉スギを植林しており、山林も林道を作っておりますので、サクラ・ハナミズキを植えたりして、高校生と一緒に地域貢献、循環型の山づくりを実践中です。少々 PR めいたことを言いましたけど、そんなことを進めています。以上です。

○高田座長

今の各業界の方から、川上から川中のお話を伺いました。ちょっと今回残念ながら、合板工場が参加されていないので、是非、合板の状況もお伺いしたかったところですが、今回はちょっと残念です。

今までの色々なご意見はどちらかというと、端的に材が足りない、というようなご意見が多かったのですが、東北森林管理局 岩谷さん、全般として、この材の足りないというような状況に対して、何かお考え、ご意見ありましたら伺えたらと思います。いかがでしょうか。申し訳ございません。また難しいことをお願いしました。

○東北森林管理局 資源活用課 岩谷企画官

国有林としては、やはり森林・林業基本計画の方向というのがありますので、今は、増産型、これ以下にはもうならないってというような流れになっているかと思います。今年度もしくはそれ以上の生産量になっていくのだろうなと思っているところです。

虫害の話があったのですが、例えば自動選別機を持っているところに直送して、できるだけ流れを良くしようとか、そういう取り組みを引き続きやっていこうと思っています。

そういったところで害虫対策に貢献できればと思います。ただ伐採時期を後半に「ずらす」というふうになると、事業体の方のお話も出てきますので、そこは中々厳しいかなと、制度的なところで直送のシステムとかを使いながらやっていければなと思っています。以上です

○高田座長

東北は、本当に半分国有林という状況で、他の地域に比べて国有林の果たす役割は本当に大きな地域になっていると思います。そういう意味で何度も指名してしまいましたが、今後もよろしくお願いいたします。

○高田座長

次の議題は「木材取引の現状と再生林の確保に向けた取り組み」について、林野庁から情報提供をお願いいたします。

議事 2 木材取引の現状と再生林の確保に向けた取組について

○林野庁材産業課 高橋課長補佐

資料 3 について説明。

○高田座長

只今の林野庁からの情報提供について、ご参加いただいております事業者のみなさまからコメントをいただきたく存じます。皆様に事前に質問をお送りしておりますので、その内容やそれに関連することについて、ご発言をお願いしたいと思います。先ほど林野庁からもお話ありましたが、事業者様ごとに、その立場ごとで事情がそれぞれあると思いますが、ここは是非、ざっくばらんに正直なところをコメントいただきたいと思います。

あの人がこんな事言って、みたいな話はなしにしましょう。是非、色々なことを話し合える場にしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

最初に、山形県さん、県費を投入されて再生林を 100%の形で実施されているというように伺っております。森林ノミクス推進課の荒木様。

○山形県森林ノミクス推進課 荒木課長補佐

(資料に基づき説明)

山形県では、だいぶ前から森林ノミクスということで、循環利用資源の循環利用ということで取り組んでいる。その中で、再造林というのが極めて重要であるということから、一応再造林については、伐ったら植えるということで、再造林 100%に向けた体制を構築しています。具体的には、ここに表示してある通り、5つ、推進体制・支援体制・支援制度・計画制度・技術普及、というようにやっています。

その中で、今回は再造林支援体制の推進ということで説明したいと思います。先ほど紹介がありました通り、再造林 100%のために費用全て補助するということから、県の方で再造林推進機構というものを設置しました。その中に森林再生基金ということで造成しております。関係者の方からすべて少しずつ協力金ということで集めておりまして、それを基金として造成しております。

そんな中で、それを使った制度ということで、再造林経費を 100%支援するというような内容になっています。費用の中身は、国費と県の方で緑環境税という環境税を集めておりますので、その中から 12%を、さらに県費 10%を上乗せしております。国費の 68%に対して、12%、10%、これで県の方で 90%相当分の支援を行う。残りの 10%については先ほど説明しました推進機構の方で調整して、造成している基金の方から 10%を出すというようにしております。

具体的な中身は、それぞれの補助率とそれに対しての上乗せで、最終的には、森林経営計画有りの森林施業支援事業については、実質 100%になる。循環成長対策事業に関しても 100%になるようになっている。小規模森林所有者の方に関しては、この下の方になるのですが、森林経営計画無しなので、最初補助率が 36%ということで、そこに補助 22%の嵩上げと、最終的にその上乗せを加えて全体で 70%となるようにしております。ちょっと簡単ですが、このような感じでやっております。ただ本県の場合、ここで支援して再造林 100%になるけども、中々皆伐の方が進まなくて、面積がかなり小さいものですから、今後の課題としましては皆伐を進めて、もちろん「伐ったら植える」で再造林 100%を目指しながら、材の方はもっと出していきたいと考えております。以上になります。

○高田座長

このスキームを作るにあたっては大変工夫されたのでしょうか。もちろん国庫を使ってあとは県の緑環境税とかを使っていることがあるのですが、その基金造成ということで、関係者の方々からの理解を得られる必要があるというところが大変なところだったというように思います。ありがとうございます。もう 1 点聞いていいでしょうか。再造林は、現状今何パーセントぐらいでしょうか。

○山形県森林ノミクス推進課 荒木課長補佐

県独自で算定しているのですが、70%ぐらいです。

○高田座長

確かに 100%は目指すべきなのかもしれませんが、逆に言うと循環型で再造林を全て伐ったところでやるのかというのは、あの目標としては 100%なのかもしれないけど、大事なのは手段として再造林があるので、100%の再造林を目標とすることが目的ではなくて、おそらく循環型で上手に木材の供給ができるような量を確保するということを見ると、100%を目指すとして、うまく回すというような形になるのだと思います。頑張ってください。ありがとうございます。

続きまして、秋田県庁三浦様。

秋田県は今、民間の事業者さんがたくさん集まっていたいて需給調整を一生懸命取り組んでいらっしゃるんですけども、その情報を少しここでご紹介していただくことは可能ですか。

○秋田県庁 林業木材産業課 三浦木材生産・流通チーム主幹

需給に関する話ですね。林野庁の補助事業を使っている中で、事務費をいただいている関係で、丸太の荷動きの伴う特に大きな案件については、事前に情報提供を頂く会合を立ち上げています。その中で、今年から川上の方々の出す量と川中の方々の使う量をグラフ化して、実際、需給はどうかかなというのを見合わせていますが、これから向こう6ヶ月は少し厳しいかなというそういう結果をまとめています。これにつきましては、来週、関係する打ち合わせをしますので、その場でご披露する形になるのでここでは詳細を控えさせてもらうのですが、合板工場の動き、あとは製材工場の動きが中々厳しいものがあるなというのを少し見ております。

○高田座長

私が実は皆さんに振った一つの理由は、今言われた来週、関係者の方が集まっておっしゃいましたが、実はそこには製材、合板と大きな企業さんの方々が実際に集まって、一つのテーブルを囲まれるというイメージですよ。これは東北全体の需給の会議ですけども、前回私も申し上げたかもしれませんが、それぞれの地域でどうやって山から出てくるものを、S材も含めてですけどA、B、C、Dを使うのかというのが、それぞれの業界の方だけでは中々無理で、しっかり話し合うテーブルを作られたというのが私は素晴らしいことだと思っていたので、少しご紹介をさせていただきました。

三浦さんありがとうございます。

川中プレカットら2名お話を聞きたいと思います。まずは山大の浅野さん、何かお考え、ご意見ありましたらぜひお聞かせいただきたいのですが。

○株式会社 山大 浅野生産管理課次長

冒頭からも出ておりましたが、住宅着工の低迷というのもありまして、昨年からプレカットの加工坪数の方はちょっと落ちてきています。

原木価格につきましても、各工場さんもうそうですけれども、丸太を集めようとしているのですが、中々市場に出てないということで、集荷に苦慮しています。後はこれも皆さんから出るのですが、各エネルギーコストや、人件費等も含めまして、コストが上がっておりますので、それをいかに木材価格に転嫁できるかというのが、ちょっと今不安なところがあります。製品の市況がちょっと停滞しているように感じますので、資料等も出ましたけれども、新しい木材製品の開発を進めていかなければいけないのかなと思っております。簡単ですけれども以上となります。

○高田座長

現在の燃料費等を価格に「どう転嫁するのか」、「転嫁できるのか」、「転嫁しない」という議論も、製材・木材加工だけじゃなくて、すべての木材産業にとって重要なポイントになってくるのだと思います。

流通の改革だけで、それができるのか、もっと大きな視点で取り組まなきゃいけないのかもしれない。そんな思いで聞いておりました。ありがとうございます。

川中、ウッティかわいの小野寺様入ってらっしゃいますか。

○ウッティかわい 小野寺 常務取締役

今のお問い合わせの答えになるかなんですが、木材の取引の現状でいきますと、様々な製造コストが上がっている中で、それを十分に価格転嫁できているかといえば、出来ていないというところだと思います。

ウッドショック時に製品価格が跳ね上がったその反動で、どんどん価格が今下がって、さらに下がって、今もう本当に下げが止まらないなと思っているところで、やっと今少し落ち着いてきているのかなと思っております。まだそのような価格でやっていると、本当に再生林も含めて、そもそも山の素材生産業者さんたちの伐採意欲もなくなるようなところまで、木材価格が下がってしまっているのではないかというところを危惧しているところです。

本来であれば、もうちょっと製品価格が適正な、我々が期待するようなところで、ちゃんと取引できるようになればいいなという思いはあるのですが、とはいえ、やはりハウスメーカーさん、ビルダーさん等も含めて、今、中々住宅の需要が低迷してい

る中で、コストダウンの要請はあるんですけども、中々価格を上げようという話にはなっておりません。だからその辺が本当に辛いなど、こちらの方で価格を決めるができないというところが、本当に我々の業界というか、我々の弱いところだなというふうに常々感じているところです。以上です。

○高田座長

木材流通の立場からから、少しご意見、お考えをお聞かせ頂ければと思います。物林株式会社の関口様、主に物流をやられて、どちらかというと川上の方から川下まで広く見ていらっしゃるお立場から、この木材取引の状況や再生林の確保に向けた取り組みについて、というテーマに何かご意見を考えればぜひお願いしたいのです。

○物林株式会社 関口盛岡営業室長

再生林の確保に向けて、取り組んでいることとしましては、一つは、北鹿協議会のところで、森林認証材の販売を今積極的に増やそうとしております。

このテーマのひとつである、認証材の価格の優位性というところまでは中々いっていないのですが、ちょっと潮目が変わってきたなと感じておりまして、需要者から広く要望が出てきています。特に、非住宅という物件では、国産材を使うということが良いというところが変わって、伐った後は、再生林されているののだろうか。という心配をする施主さんが増えてきていると感じています。

一つ、そういう認証材を使うことによって、再生林につながると思っています。もう一つは、やっぱり住宅会社さんの使う品質基準がちょっと過剰だということで、そこをもう少しA材だけじゃなくて、少し多少は割れが入っていようが、丸みがあるうが、強度に関係無く使えるところはしっかり使って、製材工場の収益改善、それが丸太価格の上昇につながって山元に帰るといふ、そんな仕組みになれば、もう少しみんなが譲り合いといいますか、使えるところはしっかり使うというところをやっていくべきことが必要なのかなと思います。大きくはそんなところです。

○高田座長

ありがとうございます。これですべてが解決するわけではないでしょうが、今、関口さんの方からの提案で、実際に取り組んでいらっしゃる森林認証材を使った動きですね。おそらく山側で森林認証を取っても、それを繋げていただかないことには、それを必要としてくれる人がいない事には、これらのものが動かない状況と変わらないので、そういう意味では、物林で取り組んでいらっしゃることは、非常に地域にとっても意義の高いことだなというふうに思っております。ありがとうございます。

民間で産業界の方々が現場でこういうことを考えている、こういう取り組みをしてい

るということをご紹介いただきましたけれども、森林総研の立場で大塚さん、お考えのことがあれば是非ご紹介いただければと思うのですが、いかがでしょうか。

○森林総合研究所東北支所 大塚研究員

最近、事業体の方たちを訪問して少しお聞きするところは、やっぱりコスト削減に対してだいぶ頑張ってきている。例えば、高性能林業機械にしても、早いところでは導入して 20 年経って、生産性のことに関して言えば、万に達してきているかもしれない。そうするとコスト削減の伸び代がない、というふうに感じられている事業体もある中で、コスト削減は大事なことはと思いますが、もう一つ何かコスト削減以外のことをオンして行く必要があるのではないかと考えています。

もう一つは、研究所でも大部力を入れています。広葉樹のプロジェクトに関わってきて、そこでの私の中でのテーマというのは、林地の全ての価値を上げていくにはどうしたら良いかという、もっと森林の価値を伝えていかないと、最終的には山に還元されていかない。そういうところから見直して行くことは、ずっと事業体の方たちもすごく意識して取り組んでおられますが、針葉樹と広葉樹を合わせて森林という、その価値を上げていく、一つの山全体で、所有林すべてに対して価値を見出していく仕掛けが必要ではないかと考えています。

○高田座長

確かに、おっしゃったコスト削減だけで、今のこの林業・木材産業が置かれている状況が変わるのかというのは、実は非常に大きく重要な指摘なのかもしれないと思いました。今から 20 年前に、あるヨーロッパの大きな工場の方と喋った時に、「我々は高く買って、安く売って、そうして儲けて生き残るのだ」と、仰っていた大きな会社がありましたが、今、日本が今までの林業・木材産業の成り立ち、それから地域での活動を考えると、このようなビジネスモデルはなかったわけですし、これからどうするか、どこかに事例を求めるのと同時に、独自にその地域地域で、先ほど冒頭で秋田県、山形県の取り組みをお聞きしましたけれども、自分たちで汗をかいて知恵を出していくというのが重要になってくるのだと思いました。

木材加工の立場からもうひと方お尋ねしたいと思います。秋田生産協同組合アスクウッド西宮さん、このテーマに関してどうでしょう。意見ありましたらご紹介いただければ幸いです。

○秋田県生産協同組合（アスクウッド）西宮原木仕入部長

再造林と言われると川中の方で難しいですが、全般について、ちょっと意見というか考えを述べさせていただきます。

非常に今の原木の市況がタイトといいますか、集めるのに苦戦している状況です。やっぱり一旦は、昨年一昨年もそうですけど、夏場に非常に需給が緩んでしまっているという、結局、原木価格は落ちてしまっている。先ほどの虫害の問題も皆さんからありましたが、虫害も、この需給が緩んだ時に山に置かれるものもそうですし、各工場の在庫量も増えてしまうので、そうすると長い間夏場に伐った物が置かれてしまう、そうすると虫害材が増えるということに関係していると私は見ています。結局、山の方々は、針葉樹の伐採をしなくなる、計画を変更する、計画を変更してそれが実際に今時期になると今度は足りない、と言うことを2年続けてやっている。さらにここに来て、昨年度は、広葉樹が非常に冬場、高く売れるということから、針葉樹から、広葉樹の仕事に移ってしまうのが非常に多く見られる。結局、それを2年続けて同じようなことをやっている。我々としては非常に歯がゆいといいますか、うまくいってないなと感じています。

もちろん個々の企業でそういった現状を踏まえて、色々な納材先と約束するのもあると思いますけれども、例えば在庫量とかいうのは全く計画した通りにはならないわけで、そうすると、予定したよりも多く取れないとか、出荷量もそうですけれども、思ったほど出荷できないと在庫が多くなってしまいうということがあります。きちんと約束通りの数量での入荷、山からの出材、我々の消費というのが、うまく行っていないのは、ここ2年ぐらい続けての現象かなと思っています。こういった協議会もそうですけども、秋田県でも秋田県の中の協議会というのもありますので、皆さんの力もお借りしながら、何かうまく回る方法を考えていければと思います。以上です。

○高田座長

続けて同じ状況という話をされたときに、私の横に座ってらっしゃる鈴木会長が、そうだよなあという顔をしていらっしゃいましたけど、どうでしょうか。本当に歯痒くて、「何とかしなきゃ」っていうことですよ。

○秋田県生産協同組合（アスクウッド）西宮原木仕入部長

はいそうです。

○高田座長

今すぐ何かこれをやるっていうのは中々ないのかもしれませんが、是非、アスクウッドさんも中心となって状況を変えていただければと本当に思います。自治体からは山形と秋田にお話を聞きましたので、岩手県木材担当課長さん千葉様、突然で申し訳ございませ

ん。自治体のお立場でこの岩手県としてこのテーマに関して何かご意見あれば幸いです、いかがでしょうか。

○岩手県林業振興課 千葉課長

再造林が重要だという話で、岩手県の場合は再生機構さんの方において再造林を進めており、以前と比べまして再造林が進んでいる状況です。先ほど森林総合研究所の東北支所の大塚さんが話していたのが、至極ごもっともなお話なのかなと思い、何かいいアイデアが出てくればいいなと考えていたところでした。

○高田座長

大変多くの方から、貴重なご意見、ご提案も含めていただきました。私の方でこの件に関してちょっと思うことは、先ほどから何度も出ているのですが、例えば人件費の高騰だとか、製造費が上がってきていて、価格転嫁のことを考えてないのではないかな。それから今の話もありましたが、「コストダウン」だけで、どうやって今の状況を変えるのか。「原木が足りないのではないかな」というようなサジェスションもありました。個人的に思うのは、やはりまずは「売れてナンボ」であって、その上できちんとした取引価格で売れて、それが山に戻っていくという仕組みだと思います。そういう意味では、皆が「一体になって」、「どこに対して」プレッシャーをかけて、「どういうふうなやり方」をするというのを、もう一度考えなきゃいけない。これはもう東北の話を超えてしまっているのかもしれないけども、そう思っております。

ここで突然ですが、鈴木会長に少しお話していただければなと思うのですが、私が思っていたこと含めてですが、何かコメントいただけないでしょうか。

○鈴木会長

今の話を聞いていると住宅着工戸数が低迷している話が多かったですが、やはり需要が拡大しないと価格は上がらないと思います。そういう意味では非住宅部門の需要は建築資材としては半分あるのですが、その木造率をどうやって上げるとかというのが、一つの大きな課題です。

これについては、林野庁の方でもうちょっと需要拡大できるようにやって頂きたいと思いますが、木材利用促進協定の資料が付いていますが、これ中央でやっているのですけども、やはり地方の自治体ですね。各都道府県庁と地場のゼネコン、地場のスーパーとか、そういったところと木材利用促進協定を地方で結ぶという流れを作って、需要回復しないと、なかなか最終的な川上の立木価格に戻って来ないじゃないかと思います。是非、そういう活動方針で取り組んでいただきたいと思います。

そして、もう一つ大きいのが、建築構造材だと立方単価で取引されますが、内装材・バス・トイレ・キッチンとか設備機器だと平米単位とか坪単位、そして一個幾らで取り扱わ

れている。それを立方換算すると巨大な単価に上がるのです。そういう意味で行くと、他の色々な「備品」とか「箱」とか「家具木工」、すべての業界が経済産業省所管になって、国交省との関係は、林野庁は非常に良いわけですが、経産省所管物資をどうやって、もう少し木材利用を進めるかということが、極めて重要なポイントになるのではないかと思います。

併せて、今いろいろお話があったように、川上から川中に入る丸太、この需要に応えられてないところが、今、東北の非常に大きな問題になっております。これには需要の変わり目の時に、「川下から川中」、「川中から川上」へ、どういうタイミングで、誰がどうやって、情報のメッセージを出すかということが、極めて重要なポイントだと思います。

この機会というのがなかなかない。実際、東北の木材流通を見れば、各県またぎで流通していますので、この各県の情報を一体誰が整理するのかというところが大事だと思います。

とりわけ需給協議会という組織でやった場合に、結果的に丸太が荷余りになった時、どういうシミュレーションを最初から作っておくのか、丸太が逆に供給不足になった時、その時のシミュレーションはどうするのか？というのを、やっぱり整理をしておいて、ただ協議会で話してこういう状況でしたっていう事で終わるのではなく、本当に困った時にどのように動くのか。というシミュレーションをやる必要があるのではないかと思います。せっかくウッドショックと逆ウッドショックの両方を体験したので、私はそれができるタイミングは、今じゃないのかなと言うふうに思っております。

もちろん単価の問題とかいろいろな問題がありますが、やはりこういう需給の会議をする場合は、「こういう状況になったら何をするのか」というシミュレーションをきちんとやっておくということが大事だと思います。

あと大きく東北地区で話題になった虫害の話ですけど、虫害に遭うのはやっぱり山の中で、虫が出る暑い時期に丸太を長い時間置いていたことが虫に食われる根本なので、その時期は伐ったら先ず即出す、昔、我々が若い時に夏場のことで教わりましたのは、「朝、カラスが止まっている木が夕方には製材品になっている」、これが夏場の仕事のやり方だと教わりました。そういった意味で、特に国有林比率の高い東北としては、請負生産で伐った木は、即販売するという流れを作ってもらうことが、一つの手ではないかと思います。

もう一つ、私の若い頃には、夏場は一ヶ月半ぐらい用材を伐るのをストップしました。今では秋過ぎまで暑くなるので、時間的には長くなっていますが、そういった虫害防止のやり方というの、今後、皆さんと一緒に考えていきたいなと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

全体を通しての感想みたいなものですみません。ありがとうございます。

○高田座長

鈴木会長には、後ほど最後にもコメントいただきますが、今回この木材取引の最近の確保に向けた取り組みということで、各参加されている事業体のみなさまから様々なご意見いただきました。ありがとうございます。

今、会長からのお話でありました、この協議会の場は、単なる情報共有で終わらずに、是非、次に向けての取り組みができるメンバーの方々がいらっしゃるわけで、是非、いろんな形で「官・民」でしっかりとした取り組みを進めて行ければと思っております。他に何かコメントございますか。なければ少し早いのですが、次の話題に進みたいと思います。

○林野庁 高橋課長補佐

先ほど、林地全体の価値向上ですとかそういったところで、広葉樹の話も出ておりました。そして、今ほど鈴木理事長からも内装材などの経済産業省所管の物品をどうしていくかというお話もあったところですが、広葉樹について、今年、昨年と良いというお話だったのですが、それはどういった方が買われていかれるのでしょうか。それで何になっていくのかというところを、少しご知見いただきたくお願いします。

○高田座長

私のところに実は学の立場ですけども、相談に結構いらっしゃいます。一つは、ウイスキーの樽（バレル）ですね。「樽材としてミズナラを使えるのではないかな…、でも、水が漏れるところがあるので、どういう木取りをすればいいか一緒に研究してくれ」とか、未だにまだそういう相談が来ます。私のところはミズナラが多いですが、この見地から、今参加されている方から、うちはこんなことがあるよということがあれば是非お話頂ければ幸いです、岩手県の伊藤さんいかがでしょうか。

○岩手県森林組合連合会 伊藤木材販売グループ長

やはりこの価格が上がっている要因として、まず外材が中々手に入らないという部分が非常に多いので、その輸入から国産の方に切り替わったということが、まず一番大きなところですね。広葉樹の用材に関しては、家具の用途とかが圧倒的に多いというところは聞いております。

先ほどのミズナラについては、最近ミズナラが中々出てこないで、コナラでも樽を作っている。ナラに関しては、その樽の用途で値上がりが見えております。

あとは様々ですね。以前サワグルミという木でバトミントンのラケットを作りました。サワグルミというのは、昔「安（ヤス）」と呼ばれていまして、安いから「安」の木だと呼ばれているようなところもあったのですが、そういうものも含めて、いろいろなものの

使用が良くなっているというところから、少しずつ国産の広葉樹が見直されてきているところが一番大きいところかなと思います。

低質材についても、少しずつ値上がりが起きております。ナラの薪用の材料も立米単価14,000 円くらいで販売されています。先ほど三菱さんから、低質材までそっちに行っていないか、みたいな話も出たのですが、ナラに関しては薪の用途とかで市場で販売されている部分もちょっと増えてきていると思っております。低質の底上げというところも一つ価格が上がっている要因の一つかなと思っております。

○高田座長

林野庁はいかがでしょうか？

○林野庁 高橋課長補佐

ありがとうございます。参考になりました。家具が圧倒的に多いという話でしたけれども、やはりいろんな用途があって、いろんな樹種が使われるということで、今林野庁の方でも、広葉樹をちゃんと考えていこうというような話も進んでおります、我々も勉強して行きたいと思っております。ありがとうございます。

○高田座長

ありがとうございました。大塚さんお願いします。

○森林総研東北支所 大塚研究員

広葉樹に関して少しだけ補足させていただきますと、広葉樹がロシアから輸入されないということで、アメリカからどのぐらい輸入されているのか、ということについて、アメリカ広葉樹輸出協議会の協力を得て、アメリカ農務省のデータを見てみますと、中国の爆買いに今のところ勝てず、広葉樹全体としてはどんどん輸入量が減っている中で、唯一、ナラだけ増えている実態がありました。その理由について、国内のフローリングメーカーさんにお聞きしてみると、一つは全国に生育しているため、広葉樹の中でも資源量が確保できて、歴史的に製材技術の構築も大きいため、加工についてのノウハウを持っている。また強度があって、家具材・内装材・建具・椅子・床など、いろんなことに使え、床暖房にも耐えるという。結構面白かったのが、ナラは日本人の好みの風合いであるということ。ナラがそんなに高いのだったらクリを使ったらいいじゃないですか、とお聞きしたところ、クリの肌合いを好む人もいるのだけれど、一般的にナラの優しい肌合いのほうが好きという日本人が多いということを伺ったりしました。

○高田座長

他に何かこの広葉樹の件でご意見・情報持ってらっしゃる方いらっしゃいますか。よろしいでしょうか。

座長はあまり発言しない方がいいかもしれませんが、広葉樹の利用は非常に重要だというのは、多分皆さんお考えのとおりだと思います。その上で、やはり針葉樹と広葉樹が多ければいいって訳ではありませんが、実際に動いている立米数とマーケットの大きさ広さで、それぞれの抱えている問題が違いますので、どちらかに偏ることなく、ということではないかと。冒頭、鈴木会長からお話ありましたが、SからDまで、いろいろな業界の方がいらっしゃって、歴史的にも使い込んでいる。それこそ広葉樹の家具もそうですが、多分問題にしなくてはいけないのが、それぞれで抱えている問題を解きつつ東北全体で、価値を高めていく作業が重要になってくるのだらうと思います。言うのは簡単ですが、これ、中々大変ですが、特に皆伐再生林を進めるとなると、特定のA材だけ、例えばB材だけが出て行くとか、A材だけが欲しいですというようなことは、もうできなくなっていくと思うので、ある意味いろいろな業界の方々が情報交換をしながら、需給の状況を新しく作り上げていくようなことも必要になってくるかもしれません。

これは、東北全体というよりは、地域地域の取組で、もう既に動いていらっしゃる地域もありますし、流通の物林さんが入ってお手伝いをされている地域もありますし、ここにいらっしゃる方々がもうすでに工夫をされているところではあると思いますが、そういう動きがきつと、この先ももっとも重要になってくるのではないかなと思ひながら、皆さんの話を聞いておりました。ありがとうございます。

○高田座長

次の議題、資料4 公正取引委員会からの説明です。

議事3 公正取引委員会からの説明

○公正取引委員会企業取引課 小野寺指導係長

資料4について説明。

○高田座長

ありがとうございます。続きまして議題4に移ります。林野庁から今後の木材需給情報の共有のあり方について説明をいただくことになっております。資料5になりますかね。お願いします。

議事4 その他

○林野庁 高橋課長補佐

資料 5 について説明

○高田座長

確認ですが、中央協議会のみを主として地区別協議会は必要に応じて開催ということは、基本的には開催をしないという理解でよろしいですかね。

○林野庁 高橋課長補佐

そうですね。今のところ、当面はそうようになろうかと思います。

閉会

○高田座長

時間が迫ってまいりましたが、全体を含めて参加いただいている皆さんから何かご意見、補足等ございましたらお受けしたいと思います、いかがでしょうか。

特になければ、それでは、今日は最後に本日の会議全体について林野庁及び協議会会長からコメントいただければと思います。引き続きで申し訳ございません。高橋さん、本日の会議全体についてコメントいただければ幸いです。お願い致します。

○林野庁 高橋課長補佐

本日、長時間にわたり会議に参加、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。皆様のご発言の中で、価格転嫁はその交渉も難しいというお話や、コストダウンはもう限界というか、一生懸命やっているというお話もいただいたところです。

他方、そういう話も踏まえた上で、先ほど公正取引委員会様からのお話にもありましたけれども、やはりそれでも交渉していくことは重要だと思っております、今回の話もぜひ参考にさせていただき、こういう考え方もあるのだということで、まずは一言言ってみるというようなことが重要かと思っております。

お話の中で、来年 4 月からの改正建築基準法の話もありましたけれども、そこで性能や品質が確かなものが求められていくということ、一方で過剰品質が要求されるというお話もございました。そのあたり、しっかりと適材適所で材を使っていくというような話を木材業界の方から利用者側に説明していくことも重要かと思っております。

また、S から D 材まできちんと使うという話等は、林地全体の価値向上にもつながると感じたところです。雑ばくな感想になりましたけれども、本日は誠にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

○高田座長

どうもありがとうございました。続きまして鈴木会長お願いしたいと思います。

○鈴木会長

長時間に渡り、そして、毎年、委員の皆様にはご参加いただきまして大変ありがとうございました。

今日の話の中で、川中の丸太不足の話がありましたので、川中の人や団体の方は、川上の人に足りないという情報を流していただいて、この会議の成果が出るような形でうまくいければなというふうに思っております。当組合でも責任を持って川上の方には情報提供したいと思います。

再造林の話がありましたが、やはり間伐中心時代の集材システムから、皆伐時代の集材システムへの変更をきちっとやって、全木全幹集材という仕組みに切り替えていくことが、逆に地拵え経費を減らして、再造林のコストを下げていくことにつながると思います。そういう意味で時代の変化を踏まえて、色々な政策を打っていかなくちゃいけないのではないかと思います。

最後に、青森の整備協の方がおっしゃいましたけど、高性能林業機械をはじめトラックが膨大に値上がりしており、そこは、充分認識していただきたいと思っております。

よろしくお願いします。

○高田座長

ありがとうございました。では最後に私の方からも簡単にコメントさせていただきたいと思います。

本日は皆様多様なご意見をいただきまして本当にありがとうございます。

私は東北の事情しか知らないと言ってもいいぐらいで、東北にもう 20 年いるので、逆に言うと、東北の皆さんが今置かれている状況をきちっと把握されて、今少しずつだけでも動き出しているよということがこの場で共有できたことは、非常に嬉しく思います。

と同時に、この協議会は来年まだあるかないか分からないという話でしたが、共有するだけではなく、その先に一步二歩踏み出して行くためにこの情報共有があったというふうに思いますので、そういう意味では、私がお手伝いさせていただいて 2、3 年ですか、色々な建設的な意見が出てきていることを本当に嬉しく思いますし、また今後お手伝いできる機会があれば一緒にしたいと思います。よろしくお願いいたします。

最後にもう一点だけ、鈴木会長がおっしゃいましたが、実はもう本当にマーケットが変わって、山の状態が間伐から主伐に代わって、それからウッドショックもあって色々なことが日本の周りや国内にも起こってきている中で、じゃあ誰と戦うのですか、という話はもう一度この地域の中で考えてもいいことだと思います。少し考えれば、恐らく簡単なことだと思うのですが、そのためには変えなくてはいけないこと、変わらなければいけないことがあろうかと思います。その辺もまた機会がありましたら、みなさんにご相談しながら前に進めていければいいかなと感じております。

本日はどうもありがとうございました。以上で本日予定された議題は終了となります。出席者の皆様のご協力に感謝申し上げて、進行を司会にお返しいたします。ありがとうございました。